氏名	副島 健作 (教授)
こんな研究をしています	現代日本語文法、言語学、日本語教育を専門分野として、日本語教育に必要な「日本語らしさ」とは何か、世界の言語のなかで日本語はどんな特徴を持っているのかについて、アスペクト（開始、進行、継続、完了等）やヴォイス（能動、受動、使役等）といった「文法構造」の課題を中心に研究しています。
こんな成果を挙げています	副島健作（2024）. 音声言語における結果表現の使い分け—過程の知覚はどう影響するか—. 社会言語科学, 27(1), 127-142. 副島健作（2023）. 受身や自動詞とその周辺構文による結果の表現—日本語, 韓国語, ロシア語, エストニア語を対象に—. 異文化, 24, 107-131. Soejima, Kensaku (2014). On expressions of agent de-topicalized intentional events: A contrastive study between Japanese and Russian. <i>Journal of Japanese Linguistics (JL)</i> . Vol. 30. 2014. 115-136. 副島健作（2013）. 「原因」を表す接置詞の文法化: 日本語とロシア語を対象に. <i>Studies in Language Sciences—Journal of the Japanese Society for Language Sciences—</i> . 第 12 号. 2013. 95-111. 副島健作（2007）. 日本語のアスペクト体系の研究. ひつじ書房.
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	自然な日本語について考えることは、日本語教育にとって非常に有益です。外国人日本語学習者が話す日本語にはどこか不自然さがあり、違和感を感じることがあると思います。また、意図せずに発した言葉が相手を不快にさせてしまうこともあるようです。こうした不幸な事態を避け、彼らが違和感のない自然な日本語を話せるようになるためには、自然な日本語についての理解を深め、理論的に検討することが重要です。さらに、そのうえで行う日本語教育が多文化共生社会で果たす役割についても興味を持ち、研究しています。
こんな授業を行なっています	「多言語関連論ⅣA」 日本語を母語としない学習者に日本語を教えるという視点から、日本語に関する知識を深め、日本語学習者の母語と他の言語との相違点を理解します。また、コミュニケーションのための文法や語彙について考察し、多文化共生社会における日本語の役割とその言語学的側面について理解を深めます。
学会や社会でこんな活動をしています	日本語教育学会 審査・運営協力員（2020年4月-） 日露青年交流センター 日本語教師派遣事業 研修コーディネーター（2023年4月-）
私が思う多文化的かつ、インターカルチャーな人物	多文化的かつインターカルチャーな人物として、理想的な日本語教師が思い浮かびます。日本語教師は、異文化理解と多様性の重要性を日々の教育で実践しています。異なる文化的背景を持つ学生と接する中で、多文化共生の視点を養い、効果的なコミュニケーションを行っています。このようにして多文化共生社会の実現に貢献している日本語教師こそ、真のインターカルチャーな人物と言えるでしょう。